

令和 5 年 6 月 9 日現在

機関番号：12603

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2020～2022

課題番号：20K22040

研究課題名（和文）感覚による信念の生成－ベナンにおける精霊マミワタを事例として

研究課題名（英文）Generating beliefs through the senses: The case of the spirit Mamiwata in Benin.

研究代表者

村津 蘭（Muratsu, Ran）

東京外国語大学・現代アフリカ地域研究センター・研究員

研究者番号：50884285

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,700,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は現代アフリカの都市にあふれる「超常的現象」を経験の次元から探究するものである。COVID-19による現地調査中断が続き、当初は遅れていた研究課題であるが、2021年度後半より渡航が可能となり、ベナン及びトーゴで聞き取り調査を行い、また参与観察を実施することができた。また、研究成果としては学会の発表に加え、シンポジウムなどでも口頭発表してきた。論文は関連するテーマで日本語論文4本、英語論文3本を公刊した。また最終年度にはベナンのペンテコステ・カリスマ系教会の「超常的経験」をめぐった単著1冊と、成果の映像人類学的方法を探究する編著1冊を刊行した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は現代アフリカの都市にあふれる「超常的現象」についての言説を経験の次元から探究するものである。これまでのアフリカ研究では人々が語る「超常的経験」はその経験の真偽は問われることなく、政治や経済などを表象するものとして縮減され論じられてきた。その結果、起点のなる人々の経験とそれが説得力を持ち現実を生成していくメカニズムについては十分に明らかにされてこなかった。本研究は「超常的経験」の環境的・状況的な条件、言語的表出のされ方や都市における身体的な経験、メディア状況を捉えることによって、「超常的経験」が現実に入り込まれ現実を再構成するあり方を明らかにし、文化人類学的議論に貢献した。

研究成果の概要（英文）：This research explores the dimension of "supernatural phenomena" prevalent in contemporary African cities from an experiential perspective. Although the fieldwork was interrupted due to COVID-19, it became possible in the latter half of 2021, allowing for interviews and participant observation to be conducted in Benin and Togo. The research findings have been presented at academic conferences and at symposiums. Four Japanese papers and three English papers related to the theme have been published. In the final year, a monograph was published on the "supernatural experiences" within Pentecostal charismatic churches in Benin, and an edited volume was published to explore the anthropological methodology of the research outcomes.

研究分野：文化人類学

キーワード：宗教人類学 西アフリカ ベナン 霊的存在 マミワタ 信念

1. 研究開始当初の背景

かつて呪術や現世利益的な宗教実践は、近代化とともに消え去るといわれていた。しかしアフリカでは、近代化した都市においても妖術・呪術に対する恐れは強く存在し、ペンテコステ教会、新宗教など抗妖術・呪術の実践を行う宗教活動が興隆している [Gifford, 2016]。これらの現象をコマロフ夫妻 [2001] は、資本主義の流動性と不確定性という点から説明したが、「呪術のモダニティ論」とも呼ばれるこれらの議論は、人々の実践を社会・経済的コンテクストに短絡的に落とし込むことで信念・実践の意味を捉え損なっている側面が批判されてきた [梅屋, 2017]。

一方、近年の人類学的研究ではモノや身体を、ヒトの行為の意図や意味を運ぶ器としてのみ描いてきた心身二元論に対する反省から、人々の実践を描くことを重視し、身体やモノそのものに着目することが提唱されている [Howes, 2005]。そこから生まれた、「感覚」や「マテリアリティ」を鍵概念とする視点は、各民族に特有の身体感覚に着目する新しい議論を展開してきた [Geurts, 2002 など]。しかし、これらの研究では、民族特有の感覚を本質化してしまい、静的なものとしてのみ捉える傾向がある。また、そこで用いられてきた方法である参与観察や民族語彙の調査では、環境の中で直接訴えかけてくる感覚的体験や、「目に見えない」霊的諸力の存在のあり方は十分に捉えきれていなかった。このような背景の中で、民族を超えて共有され、変動し続ける「目に見えないもの」への感覚に着目した研究が求められている。それと同時に、文字情報だけでは捕捉することが困難な「感覚的経験」を理解するための新たな民族誌の形が必要とされている。

2. 研究の目的

本研究では、近年キリスト教教会と在来信仰結社の双方において急速に存在感を増している海の精霊マミワタ (Mammy Water に由来) などの超常的存在に焦点をあてる。アフリカ沿岸部の都市を中心に流通するマミワタは、個人主義的、商業主義的な特色を持つとされ「モダニティ」と結び付けられ論じられてきた [Meyer 1999]。しかし、夢や憑依という形で若年層を中心に現われるこの精霊が、どのように都市的環境の中で人々の経験を形作り広まったかについては明らかにされていない。本研究の目的は、都市的環境と身体の相互作用の中で精霊が感じられるようになる過程を明らかにすることで、現代アフリカ都市を生きる若者の身体的現実と信念の形成と伝播過程を示し出すことである。

この研究が独創的であるのは、民族・宗教を跨いで現われる精霊マミワタに着目することで、アフリカの宗教を巡る「なぜ一つの民族の信念が隣り合う民族には共有されないのか」という問いに、「心」や「言説」からではなく「環境における感覚」を起点として生態学的な観点から答える点である。それにより、政治・経済のメタ言説として論じられがちなアフリカ都市における精霊経験の増加という現象を、人々の経験というレベルから捉え返すことも可能となる。加えて本研究では、従来文化人類学的方法である参与観察や聞き取りに加え撮影も実施することにより、言語化される未満の感覚と環境の相互作用を捕捉する。映像はデータとして解析するだけでなく、編集した上でオンラインに乗せ、QRコードなどで本媒体である民族誌と相関させていくことで、文字情報だけでは捕捉困難な「感覚的経験」を伝える民族誌を提示していきたいと考えている。

3. 研究の方法

精霊マミワタは主に憑依、日常生活での気配、夢を通じて若年層に「突然」現れる。その後、精霊マミワタは信仰結社では「神」と崇拝されるようになり、キリスト教教会の礼拝では「悪霊」として扱われるようになるが、双方においてその実在が確信されていることにおいて違いはない。本研究は結社と教会の実践を参与観察、聞き取り、撮影することで「精霊マミワタの存在を感じる身体」が生成する過程と、環境の違いによって現われ方を変容する精霊の特質を明らかにする。

調査はベナンの経済都市コトヌーで、マミワタ信仰結社メンバー・及びキリスト教教会信者に聞き取りを行い、儀礼に参加しながら調査することを予定している。その中でマミワタ精霊に憑依される人々のライフヒストリーについても詳細な聞き取りを行なう。また、「信念」が共有される場合とされない場合の境界を論じるために、精霊マミワタを信じる人の周囲にいる精霊マミワタを感じたことがない人や、その存在を否定する人に対しても聞き取りを行ない、その差異を環境と身体や経験という観点から分析する。同時に、マミワタを信じる人が経験を語る際に用いる身振りや語彙にも着目し、信じない人とのものと比較することで、信じる人の身体的説得性の特徴を明らかにする。

4. 研究成果

COVID-19による現地調査中断が続き、当初は遅れていた研究課題であるが、2021年度後半より渡航が可能となり、ベナン及びトーゴで精霊マミワタの祭司や結社の人々、及びペンテコステ・カリスマ系教会の信者に、感覚や経験を中心とした聞き取り調査を行い、また参与観察を実施することができた。

そのことによって、マミワタが、社会的・情動的不安定な立場の若い女性に、身体・情動を通して関係を切り結ぶ存在として現れていること、その現出は、一人であることが可能な場所や時間や個別化された感覚と関係していることなどを明らかにしてきた。そして、ペンテコステ・カリスマ系教会が担っているデリヴァランスは、身体感覚を揺さぶる場所を作ることで、気配・感覚・パーソナルな経験・若者に対する懸念などが絡まり合う場所を提供し、結果として「マミワタの憑依」が実現する場を作っていることも指摘した。それにより、教会は個人的で親密性の高い感覚・場所・関係に根差した「マミワタ」の存在を、公の場で「祓う」ことを可能なものとしていたのだ。さらに、教会は身体を巻き込むことで、「祓う」ということをするだけでなく、偶発的な霊の存在、つまりマミワタを生成する契機を作っているともいえることなども事例を通して明らかにした。

また「マミワタ」だけに限らず、ペンテコステ・カリスマ系教会が伸長する中で生じている様々な霊的存在のありようをフィールドワークに基づいて明らかにするとともに、写真や映像からなるWebサイトを作成し、マルチモーダルな民族誌を制作し、公表した。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計7件（うち査読付論文 6件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 デ・アントーニ、アンドレア、村津蘭	4. 巻 86-4
2. 論文標題 《特集》世界と共に感じる能力ー情動、想像力、記憶の人類学 序	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 文化人類学	6. 最初と最後の頁 584-597
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 村津蘭	4. 巻 86-4
2. 論文標題 悪魔が耳を傾ける ベナン南部のペンテコステ・カリスマ系教会の憑依における想像と情動	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 文化人類学	6. 最初と最後の頁 635-653
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Ran Muratsu	4. 巻 2
2. 論文標題 Affective healing: Pentecostal Charismatic Churches and religious plurality in Benin	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 ASC-TUFS Working Papers	6. 最初と最後の頁 245-259
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.51062/ascwp.2.0_245	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 村津蘭	4. 巻 82-1
2. 論文標題 悪霊との情交ー西アフリカ、マミワタの憑依におけるペンテコステ・カリスマ系教会の役割ー	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 史苑	6. 最初と最後の頁 107-134
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Ran Muratsu	4. 巻 23-1
2. 論文標題 The Transformation of Togetherness with Spirits: Deliverance and Witch Possession in a Pentecostal-Charismatic Churches in Benin	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 Japanese Review of Cultural Anthropology	6. 最初と最後の頁 99-133
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Ran Muratsu	4. 巻 52(1-2)
2. 論文標題 Inter-religious Demonisation and its Persuasiveness: The Case of a Newly Emerged Church in Southern Benin	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Journal of Religion in Africa	6. 最初と最後の頁 52-79
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 村津蘭	4. 巻 0
2. 論文標題 妖術と人類学の喚起、その拡張	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 拡張するイメージ人類学とアートの境界なき探究	6. 最初と最後の頁 18-59
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計8件 (うち招待講演 1件 / うち国際学会 2件)

1. 発表者名 村津蘭
2. 発表標題 メディアと憑依 ベナンにおけるペンテコステ・カリスマ系教会の事例から
3. 学会等名 日本アフリカ学会第58回学術大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Ran Muratsu
2. 発表標題 Affective Healings: Pentecostal Charismatic Church and Religious Plurality in Benin
3. 学会等名 ASC-TUFS 5th Anniversary International Symposium (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Muratsu Ran
2. 発表標題 Multimodal Spirits
3. 学会等名 A Biennial Conference of the Society of Cultural Anthropology and Society of Visual Anthropology 'Distributed 2020' (国際学会)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 村津蘭
2. 発表標題 ペンテコステ派・カリスマ派を起因とする霊的存在の変容 - ベナンのデリヴァランス儀礼を事例として
3. 学会等名 日本アフリカ学会第57回学術大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 村津蘭
2. 発表標題 妖術をめぐる想像と憑依 - ベナンにおける悪魔と対峙する新宗教を事例として
3. 学会等名 日本文化人類学会第54回学術大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 村津蘭
2. 発表標題 憑依におけるメディアと情動
3. 学会等名 国立民族学博物館共同研究会「拡張された場における映像実験プロジェクト」
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 村津蘭
2. 発表標題 悪霊との情交 西アフリカ、精霊マミワタの憑依におけるペンテコステ・カリスマ系教会の役割
3. 学会等名 立教大学史学会大会シンポジウム「アフリカの若者の身体」(招待講演)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 村津蘭
2. 発表標題 憑依による妖術師の変容 - ベナン南部のペンテコステ・カリスマ系教会におけるデリヴァランス儀礼を通して
3. 学会等名 第56回ASC(現代アフリカ地域研究センター)セミナー/アフリカ学会関東支部:2020年度 第6回例会
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 村津蘭	4. 発行年 2023年
2. 出版社 世界思想社	5. 総ページ数 448
3. 書名 ギニア湾の悪魔 キリスト教系新宗教をめぐる情動と憑依の民族誌	

1. 著者名 藤田 瑞穂、川瀬 慈、村津 蘭（編）	4. 発行年 2023年
2. 出版社 亜紀書房	5. 総ページ数 404
3. 書名 拡張するイメージ人類学とアートの境界なき探究	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関